

田布施町立麻郷小学校 研究概要

1 研究主題

「あい」ある学びで深まる授業 ～アウトプット力を高める授業の工夫～

2 主題設定の理由

本校では、昨年度研究主題を新たに「『あい』ある学びで深まる授業」とし、「アウトプット力を高める授業の工夫」に視点をおいて研究を進めてきた。

導入では、「本時で何を考えればよいのか」を明確にするための手立てが効果的であった。前時との違いの確認、場面や課題の整理などを行うことで、今日は何についてみんなで考えていくのかが明らかとなり、ぶれのない授業づくりにつながった。

展開では、一人で考える時間をしっかりと確保することで、話し合いや伝え合いが活性化していた。自分の考えを共有するために効果的であったのが、一人1台タブレットの活用である。自分の意見が授業に反映されていくことで、児童の学習意欲が高まるとともに、児童の思考の流れを重視した授業づくりを行うことができた。また、昨年度はアウトプットする時間を意識的に多く確保した授業が多く見られた。友達の説明をもう一度自分の言葉で説明する、自分の考えを文章で書く、模範的な言い方を一人一人が繰り返して言うなど様々な形でアウトプットをする時間を設けることができていた。

終末では、適用問題やふり返りまでを時間内に終えることができる授業が多くなっていた。その要因として、導入部分で述べた「本時で何を考えればよいのか」を明確にしたことが考えられる。考えることがはっきりしたことで、展開部分の話し合いや伝え合いも精選されたものとなっていた。

課題としては、以下の3点が挙げられる。

まず1点目は、つながりのある対話である。昨年度に比べると、児童が「話す」「書く」「行動する」時間が増えたものの、その内容については改善の余地があると考えられる。何のために話すのか、児童が話したり伝えたりする必要性をもっているのか、どのような話し合いを目指すのかという話し合いの目的を教師が明確にもち、適切なタイミングで設定することが必要である。アウトプットの時間を確保する段階から、次はアウトプットの質の向上を目指していきたいと考える。

2点目としては、まとめの言葉を児童自身が記述する力をつけることである。現段階では、教師が書いたまとめを児童が書き写すだけになっている、めあてとまとめが繋がっていないなどの課題がある。本時で学習したことを自分の言葉で書くことができる、つまり、アウトプットすることができて初めて学習が定着したと言えると考えられる。

3点目としては、基礎学力の定着である。現在、授業中にアウトプットする時間は意識的に確保することができているが、学習したことを長期記憶として定着させるためには、2週間の内に最低3回アウトプットすることが必要とされている。今年度は、朝学の時間が設定されることから、繰り返しアウトプットすることも可能となる。朝学の時間を有効に活用していきたい。

以上の課題を踏まえ、本年度は引き続き「『あい』ある学びで深まる授業」を研究主題とし、話し合いや伝え合いで深まる授業を追究していく。「あい」ある学びとは、話し「合い」や伝え「合い」のようなやり取りのある学びのことである。やり取りのある学びを展開していくことにより、児童が主体となる授業を目指していく。現状としては、教師と児童のやり取りはあるものの児童同士のやり取りが少ない授業になってしまっていたり、互いの考えを伝え合って終わるやり取りになってしまったりしている。今年度は、児童同士がやり取りをする中で新たな発見をしたり考えが明確になったりするような学びを深めるやり取りを目指していきたい。

また、副主題にも引き続き「アウトプット力を高める授業の工夫」を設定する。昨年度は、意識

的にアウトプットする時間を確保し、アウトプット：インプット＝7：3を目指した授業づくりを行ってきた。しかし、課題の1つ目でも述べたようにアウトプットする内容には改善の余地がある。本校は、「全国学力・学習状況調査」や「学力定着状況確認問題」において記述式の問題に課題が見られる。必要のない情報まで書いてしまっている、使うべき言葉を使えていない、条件に合うように記述することができていないなどが要因である。そのような課題を改善していくためには、アウトプットする内容のレベルアップを図っていく必要がある。「○○という言葉は必ず使う」「○字以内で書く」「友達の説明を聞いて、自分の言葉で言い換える」「自分が書いた文章で必要ないところを考える」などの手立てを仕組むことで、ただ「書く」「話す」「行動する」段階から、条件やポイントを押さえ目的意識をもって「書く」「話す」「行動する」段階へと進んでいきたい。

また、まとめを児童自身が記述することができるように、まとめにつながるめあてを設定すること、キーワードとなる言葉を板書に残しておくなどの手立てを意識的に仕組むようにしていきたい。

そして、朝学習の時間を有効に活用し、アウトプットする機会を確保することで、基礎学力の定着を図っていく。キーワードは「スピード・テンポ」とし、時間内に計算問題を解いたり、漢字の反復学習を行ったりする中で当該学年で身に付けるべき力が確実に身に付けられるようにしていく。

以上のように、本年度も「『あい』ある学びのある授業」を行うことによって、「アウトプット力を高めて」いき、学びが定着する授業づくりについて研修を行っていく。

3 研究仮説

アウトプット力を高める授業の工夫をすることにより、話し「合い」や伝え「合い」で学びが深まる授業が展開できるのではないかと。

4 研究の内容と視点

○アウトプット力を高める授業の工夫

- ・自分の考えを相手に説明する。
- ・友達の考えを説明する。
- ・友達の考えを聞いて自分の考えと比較する。
- ・友達との対話を通して自分の考えを深めたり、新しい考えをつくり出したりする。
- ・対話したことを基に100字程度で自分の考えをまとめることで、自己の変容に気付く。
- ・話し方や書き方を吟味し、磨いていく。
- ・考えたことを実践する。

など

5 研究方法

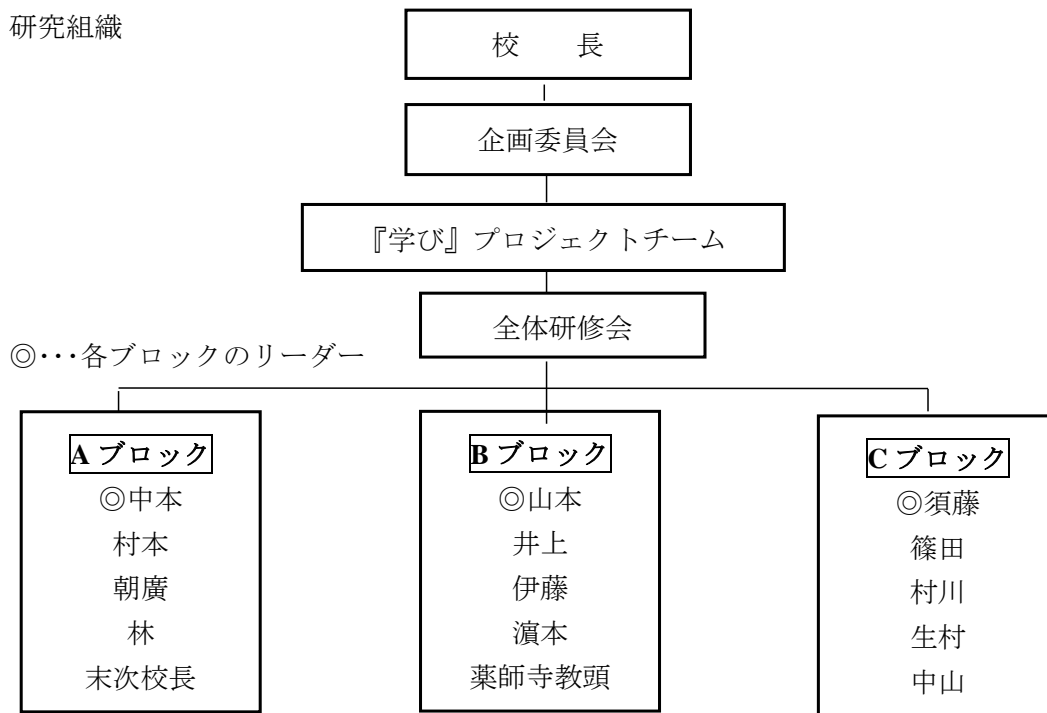
(1) 授業実践を通して具体的な指導方法を追究する。

- 一人1回は授業研究を行い、研究内容の共有化を図る。
- 全体授業（職員全員で指導案検討と授業協議会を行う）を各ブロックそれぞれ1回行う。
- その他は、ブロック授業（ブロックで指導案検討や授業協議会を行う）とする。
- 授業協議会は、ユニット型研修とする。
- 授業研究では、指導者を積極的に招聘する。

【全体授業】

Aブロック	6年1組	算数「分数÷分数」
Bブロック	3年1組	算数「何倍でしょう」
Cブロック	2年1組	算数「三角形と四角形」

6 研究組織



◎…各ブロックのリーダー

- 『学び』プロジェクトチーム
 - ・研修の計画を立てる。
 - ・各部会への浸透と、連絡・調整を行う。
- 全体研修会
 - ・研究主題や研究内容・方法について共通理解を図り、研究を推進する。
 - ・指導計画や指導方法・評価の見直しや改善をし、研究のまとめなどを行う。
- A～Cブロック
 - ・指導案検討を行う。
 - ・授業後の研究協議会（ユニット型研修）を行う。
 - ・日々の指導や授業実践の中で、課題解明に迫る。

II 研究のまとめ

本年度、研究主題を昨年度から継続し「『あい』ある学びで深まる授業」とし、「アウトプット力を高める授業の工夫」に視点をおいて研究を進めてきた。

本年度の研究から、次のような成果と課題が見られた。

(1) 成果

本年度は、アウトプット：インプット＝7：3を意識したり、アウトプットする内容に注目したりして、授業づくりを行った。それにより、アウトプットの方法やその質を検討するきっかけとなった。そして、導入・展開・終末それぞれの過程においてアウトプット力を高めるための様々な工夫が講じられた。

導入では、本時で何を学習するのか、何を考えればよいのかを明確にすることで、その後の活動の意欲につながった。算数科の授業では問題場面を絵や図で表したり今まで習った公式を確認したりする手立て、国語科では文章の段落や内容を板書で確認する手立て、理科では前時の内容から疑問を引き出す手立てなどが見られた。特に、前時の活動と比較したり、既習事項を確認したりする手立ては、展開での一人学びの充実につながった。多くの授業で、大型モニターや具体物を用いて学級全体で学習内容を確認する活動を取り入れていた。このような活動を行うことで、本時で学ぶ内容が児童に共有でき、全員で1つの目的に向かって授業を進めることができた。また、全員が同じ課題意識をもつことができ、その後の展開の活動でのアウト

プットにつながっていた。

展開では、大きく2つの手立てが見られた。1つ目は、一人学びの時間を確保する手立てである。課題を一人で考える時間をしっかり確保することで、その後の話し合いや伝え合いが活発になった。自分の考えをもつことで、その後の話し合いではグループで意見を交換し合う姿が見られた。また、自分の考えをもつために効果的だったのが、具体物の活用である。具体物を提示したり、具体物を使って考えさせたりすることで、課題をイメージしやすい児童が多かった。課題が難しい場合でも、考えをもつきっかけとなった。具体物があることによって、児童が主体的に活動に参加でき、積極的に自分の意見を伝え合うことができた。2つ目は、説明する場を意図的に取り入れた手立てである。ペアやグループでの説明、全体での説明と段階を踏んでいた学級が多かった。また、説明の目的が明確であれば、積極的な話し合いをすることができた。話し合いのゴールを示すことで、何を発表すればよいのかがよく分かり、目的意識をもって学習課題に取り組めているようであった。前述した具体物を使って、児童がより説明や課題を意識しやすくする工夫や、話型を示す工夫によって説明への抵抗をなくす工夫も見られた。また、教師が話したり説明したりする時間を最小限にし、児童が活動する時間を多く確保できるよう、意識することができた。

終末では、昨年度よりもめあてとまとめが対応している授業が増えていた。導入で何を学習するのか、何を考えればよいのかを明確にするために、教師がどのような力をつけるべきか意識したことが要因と考える。また、まとめを児童が自らの言葉で記述する授業も多かった。学習のポイントとなる内容やまとめにつながるキーワードを板書に残すことで、授業への理解度が上がったのではないだろうか。つまり、教師が授業の中で一貫して身に付けたい力を意識することで、よりよい授業づくりにつながったと考えられる。

(2) 課題

課題としては、大きく以下の3点が挙げられる。

まず1つ目は、アウトプットの質である。本年度は、教師が意識して自分の意見をノートに書く時間や説明する機会を設けた。しかし、教師と児童の対話になっていたり、自分の考えをただ伝えるだけにとどまったりと、アウトプットの質には不十分な点があった。そこで、児童同士が説明したくなる場を意図的につくる必要があると考える。また、発問を工夫することで、児童対児童の対話につながることも大切である。このようなことを踏まえた授業づくりを考えていく中で、来年度は、アウトプットの質をより向上させていきたい。

2点目は、ICTの活用方法である。多くの授業でICTを使っていたが、共有の仕方にはまだ課題がある。これまでは自分の考えと他の考えを比較する際に、一部の考えだけを取り上げていた。また、ポイントとなる考えや記述を精査できなかった事例もあった。ICTには、学級全体の考えを一斉に共有するという利点がある。これを十分に活用できるようにすることで、考えの違いに気付き、児童同士の話し合いをより活発にする手立てとなるのではないだろうか。これは、前述したアウトプットの質の向上にもつながると考える。

3点目は、基礎学力の向上である。現在、授業中にアウトプットする時間を意識的に確保している。また、本年度から朝学習を始め、学習した内容を反復する機会が前年度よりも増えている。しかし、基礎的な学習内容が定着できていない児童もいる。学習したことを長期的に定着させるためには、定期的にアウトプットしなければならない。来年度は、朝学習の時間を使って復習をより計画的に行い、基礎学力を定着させていきたい。

(3) まとめ

以上から研究を1年間続け、授業のアウトプットを教師が意識することで、授業改善や児童の理解につながる事が分かった。しかし、アウトプットの内容には不十分な点もある。ICTや教師の手立てをより検討しながら、児童の学びが深まるよう、研究を続けていきたい。